



# Ephphatha!

No.27  
春の号

日本基督教団エパタ教会 季報

〒162-0805 東京都新宿区矢来町 25 ☎ 03-3260-5222 ✉ ephphatha.church.tyo@gmail.com 2020年3月29日発行

## 日曜礼拝を考え直す

エパタ教会牧師 亀岡 顕

人生のたそがれどきになって・・・

私は日本基督教団成立（1941年6月）の約1年半後に生まれ、1960年受洗、1969年春神学校を卒後以来半世紀続けてきている教師としての歩みに間もなく終止符が打たれる頃となりました。引退した仲間の中には余生を心静かに過ごしたい、という人もいますが、私は今のところそういう心境にはなれません。

教師として教区や教団との教会政治的なかかわりが増えていくにつれ、主イエスの教会でこんなことが行われていいのかという不信感が募り、それまでの教会観やキリスト教のあり方に疑問を抱くようになりました。そこで自分でもう一度検証し直してみました。その結果、かつて自分が教えられて受け入れ正しいと思っていたいろんなことに疑問符がつき、見える景色が以前とはすっかり変わってしまったからです。

2012年以降、エパタ教会の皆さんと聖書、キリスト教について批判的な学びを重ねながらいろんなことがはっきりしてくるという驚きとよろこびを分かち合っています。

次々に湧いてくる疑問に対して自分で考えることができる限りチャレンジしていこうと思っているのでんびりしているわけにはいかないのです。それにしても此の期に及んで腑に落ちないところが増えてくるなんて…。要するに私はただ鈍いだけなのかもしれません。

### 日曜礼拝偏重

私が以前から疑問に思っていることの一つが日本の教会における極端な日曜礼拝偏重です。

「自分の体を神に喜ばれる聖なる生ける生けにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」（ローマ 12:1）私はこの礼拝をキリスト者として生きていく生活態度全体のことと受けとめて大切にしています。ところが教会の現場では礼拝と言えば日曜礼拝のことだ、というとらえ方が圧倒的です。私は礼拝を日曜礼拝に限定してしまうことにずっと違和感を抱き続け

てきました。

田川健三さんは口語訳、新共同訳が「礼拝」と訳している単語の意味は「仕えること」であり、この箇所では宗教的儀式としての礼拝ではなく、「信者の生き方」一般を意味しているとして、「(神に)仕える理性的な仕方」と訳しています。口語訳、新共同訳の翻訳が「神に仕える仕方」を狭く「(日曜)礼拝」に限定してしまう原因の一つだった！ 私が永年感じていたモヤモヤの半分は晴れました。

### 礼拝に関する偏りを正す

「教会は公の礼拝を守り・・・」(教団信仰告白)とあるように、日本の教会では日曜礼拝こそが何よりも重要だと見なされてきました。その結果、日曜礼拝を守ることは至上命令とされ順守・厳守が求められるようになりました。そしてそれに反比例するように日々の生活において神に仕えることは“それ以外のこと”として軽(無)視されるようになっていったのではないのでしょうか。

しかしこれはどう考えても偏ったとらえ方です。本来、分かち難く結びついている「信じる」と「生きる」ことのうち「信じる」ことだけが重要だと言ってもどうにもならないからです。

私はこのような日本の教会が「神に仕える仕方」を展開していくのを阻害している日曜礼拝偏重を一刻も早くやめるべきだと思っています。

### 具体的な取り組みに向けて

日曜礼拝への偏りを正していくことは、宗教的儀式としての礼拝を整えるのではなく、神に仕える者としてイエスにならって互いに相手のことを大切に生きていくために必要なことを学びトレーニングを積むことができるような礼拝を工夫していくことだと思います。そのためには従来の日曜礼拝のもち方を抜本的に変えていく必要があるかもしれません。

# “日曜の集い” 始めました

## あかしの生活の拠点

2012年9月第1日曜から新しく供えられた会堂で礼拝を始めたエパタ教会が目指しているのは、「あかしの生活の拠点（サービスステーション）」としての機能をはたしていくことです。

私たちは日曜礼拝を中心とした教会の諸集会・活動において神から与えられているいのちをイエスに倣って互いに相手を生かし合うために用いていく仕方を身につけ、各自の生活へと送り出されていきます。そこでどう生きるかが私たちのあかしの生活—伝道—です。

## 現状と課題

新会堂での活動が8年目に入ったのを機に、これからどうやっていくか、どんなことができるかについて考えてみました。

エパタ教会ではその名「Ephphatha(open)」の通り何でも言い合える開放的な雰囲気を大切にしています。それが最も鮮明に表れているのが週日の二つの集会での学びと自由な話し合いです。現在「聖書を学び祈る会」（第1、3木曜午後）では「ヨハネの黙示録」（田川健三訳・註）、「聖書に親しむ会」（第2、4木曜午後）では「イエスという男」（田川健三著）—4月からは「信じない人のためのイエス入門—宗教を超えて—」（ジョン・シェルビー・スポング著 富田正樹訳 新教出版社）—をテキストにしています。これらの会に参加している者たちは思っていること、感じたことをあけすけに言い合い、サウロの目からうろこのようなものが落ちて見えるようになった（使徒行伝9:18）ように聖書やキリスト教についているんなこと

がわかるようになる喜び・驚きを味わっています、このような学びと交わりの輪を教会の中で拡げていきたいと願っています。

エパタ教会の日曜礼拝は「神から人へ」「人から神へ」という対話のかたちをとってはいるものの、一方通行の感は拭いきれません。説教・神のことは独白ではなく、対話によって表現されてもいいのではないかと思います。

そして何よりも日曜日に教会でもに行っていることが日々の生活において直面する困難な問題やむずかしい人間関係にチャレンジしていくうえで役に立っていくことが願いです。

「日曜礼拝」から「日曜の集い」へこのようなことを考え・願いながら、2020年から日曜礼拝を月1回（原則として最終日曜）通常の礼拝、ティータイム、週日の集会での学びと分かち合い、昼食（愛餐）会等を一つにまとめて“日曜の集い”というかたちで行うことを12月の役員会で決めました。

○所要時間：11:00～12:45

105分

○場所：2F集会室（1F礼拝堂で行いたいのですが、机の移動を要するため、当面はこの場所で）

○形式：机（6脚）を囲んで着席のまま（「派遣のうた」のみ起立）

○司会・進行・発題：差し当たり牧師が担当

○内容・順序：毎回聖書箇所に基づいて「テーマ」を決める。

★第1回（1月26日）は次のように行いました。

テーマ・

「イエスは何をしようとしたのか？」

黙 想

讃美歌 432（重荷を負う者）

聖 書 マルコによる福音書

1:29 - 39

祈 り

讃美歌 438（若き預言者）

発 題 「テーマ」についてイエス、聖書からの問いかけ

讃美歌 448（お招きに応えました）

応 答 牧師の発題をもとに

話し合う

—昼食を共にしながら—

ささげもの（献金）

65-1（今そなえる）

派遣のうた 90

（主よ、来たり、祝したまえ）

—カフェ・エパタ（礼拝堂、エントランス）へと移動、さらに話し合いを続けました。

\*昼食は当面教会でおにぎり等を用意。

\*第2回は2月23日、テーマ・「“主の日”について考える」 聖書・マルコによる福音書1:12 - 15 で行いました。

\*第3回 3月29日 テーマ・「イエスに会いたいのですが」 聖書・ヨハネによる福音書12:20 - 33 で行う予定です。

（牧師 亀岡 顕）

